

浪岡城跡の謎——トラベルチエック

今回は、浪岡地区を代表する国史跡「浪岡城跡」の謎をタイムトラベルしながらチエックしていきましょう。

城・館・建物

城はいづ誰が造ったか？ 城跡は、昭和15年（1940）2月10日、皇紀二千六百年となる紀元節の前日に県内初の国史跡に指定されています。この時の指定書には、南朝の忠臣・北畠氏の末裔である浪岡氏が天正6年（157



北畠古城跡碑（有栖川宮熾仁親王題字）

【問合せ】  
市史編さん室 ☎ 017-732-5271



8)まで居城したこと、内館・北館・西館などの曲輪が河岸段丘上に残ること、内館は「行丘公園」になっており有栖川宮熾仁親王の題字を刻した『北畠古城跡碑』があると記しています。つまり、築城年代は分からないままの指定であり、天正6年、津軽為信に攻め落とされるまで、浪岡氏が拠っていたとしていきます。

本来の築城年代は？ 浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年（1977）から始まり、出土した陶磁器によって城跡の存続年代も明らかになってきました。しかし、城跡は一時期中ではありませんでした。

平安時代（12世紀後半）の館からは、かわらけや白磁などの遺物と堀跡が発見されました。これは、平泉

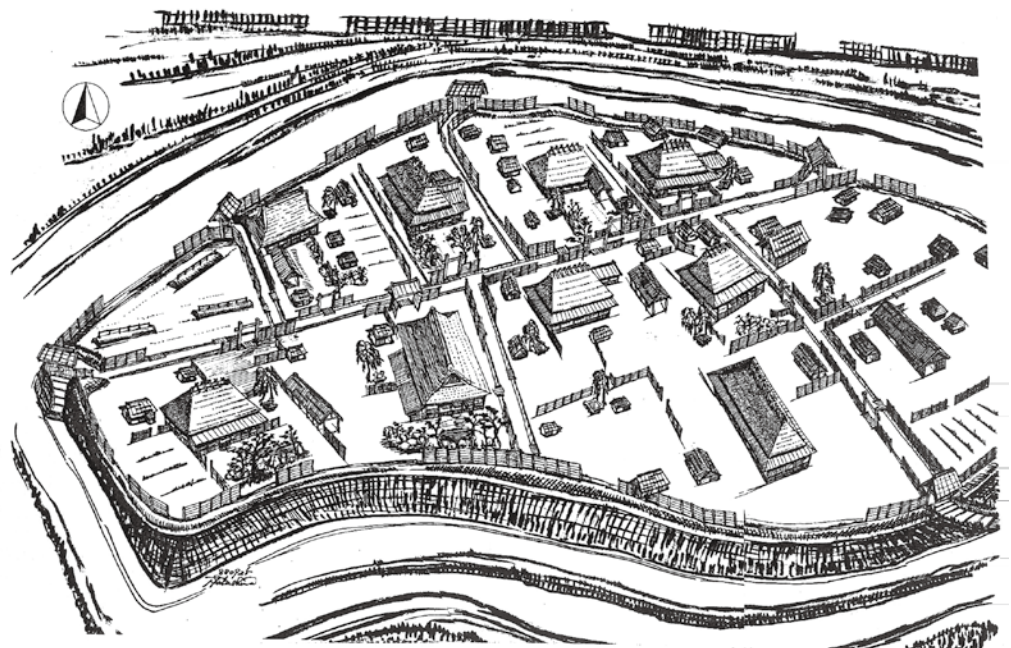
藤原氏の時代と重なるもので、浪岡城の基底には、平泉政権の影響があったことを証明しています。

また、鎌倉時代（13～14世紀）の陶磁器も少量みられ、室町時代（15世紀中ごろ）から各種遺物が増大し、戦国時代（16世紀）に最も多くなり、江戸時代（17世紀）以降は減少します。

文献史料がほとんど残っていない浪岡氏にあって、城館を築城・整備し始めた時期は、考古学調査の成果により、15世紀中ごろと推定されました。

石垣と天守閣はあった？ 城という弘前城のように天守閣と石垣・水堀を思い浮かべます。しかし、天守閣という考え方は織田信長が近世城郭・安土城を築城（天正4年・1576）して以来の考え方であり、百年以上も前に造られた浪岡城に天守閣はありませんでした。

また、中世の城館は、堀と土塁で防



浪岡城跡北館復元図：16世紀前半（高島成佑氏作成）

御機能を高め、水を張らない空堀を多用していました。そのため、曲輪の斜面に石垣を用いる例は少なく、浪岡城にあっても石垣を構築することはありませんでした。

城内の建物と住人は？ 城の中には礎石をもつ建物と掘立柱建物そして竪穴



出土した中国製の陶磁器

の建物が、数時期にわたって重複しながら存在していました。これらの建物は、屋敷とみられる空間に井戸などとともに建築され、柱の間隔や位置関係から特定された時期については、復元図を作ることができました。

その結果をみると、16世紀前半では、城主の居住する館は内館、家臣団の屋敷が広がる館は北館と考えられるようになり、東館や西館も家臣団の屋敷があったと思われる。城主と家臣・賓客が対面するための部屋である九間（このま）に内館で発見され、現在「中世の館」に復元展示しています。

ところで、中世の時代に竪穴の建物が存在することをどのように考えます

か。縄文時代ならいざ知らず、鎌倉・室町・戦国時代になっても竪穴を利用していることは不思議な気がしますが、実は、全国的にも一般的なのです。

たとえば、『一遍上人絵伝』（鎌倉時代）においても竪穴建物が描かれ、中世都市・鎌倉では土倉として、東北地方の城館では鍛冶工房として、そして浪岡城では掘立柱建物に武士階級が、竪穴建物には下人・職人などが住み分けしながら居住していたと推定されました。

ところが、これだけたくさんさんの建物が発見されているにもかかわらず、いまだに「ここが便所」という場所は見つかっていません。もしかすると、建物の周囲でなく、堀に共同便所が備えてあったのでしょうか。

### 北日本を代表する出土遺物

女・男、流通する遺物？ 出土した遺物の中で、明らかに女性の使用したものがあります。一つは紅皿、二つは鏡、三つは鉄、四つは毛抜き鉄です。いずれも化粧道具で、むさくるしい武士だけでなく日常生活を営む女性がいいたことを示しています。もちろん、武士の使用する刀・鐔・鉄鍬や鎧などの武器・武具も多く出土しますが、それ以上に陶磁器・銭貨・漆器などが発見され、城館は、政治的のみならず経済的

な拠点であったことも示しています。特に、陶磁器については生産地が分かる資料が多く、国内産では瀬戸・美濃・常滑・信楽・珠洲・越前・備前・唐津・奈良火鉢があり、中国産では龍泉窯の青磁や景德鎮の染付・赤絵、朝鮮産陶器も出土し、総数2万点近くの数量は、東アジアの流通経済の一端をみせてくれます。

埋納される遺物？ 陶磁器とともに鉄製品や木製品・石製品・銭貨は数の多さもさることながら、出土状態にも当時の精神性をうかがえる事例が存在します。

埋納とは、人間が意識的に「モノ」を埋める行為であります。例えば、伏せた鉄鍋の中に農具一式を埋納した事例。内耳鍋の脇に鎌を置き、中には芋引金（麻の繊維をすく道具）・小刀・轡・鍬などを安置して、神事に使う左衽の縄も残っていたものです。鉄鍋をかぶせることは、災いを封じ込める意図もあることから、出土した遺物の使用者の悪霊を封じ込めたものかもしれません。

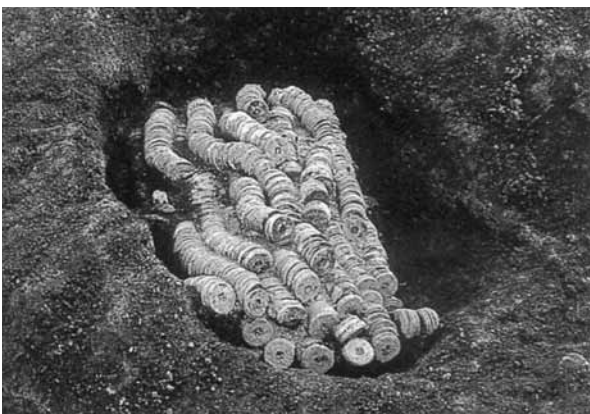
また、前述した竪穴建物跡からは、銅鏡2面や鉄錠といわれる鉄素材、さらには刀が床面に置かれていた事例もあり、一種の埋納と考えられます。銭は備蓄か埋納か？ そこで考えて欲しいことがあります。一般に城跡からは、銭貨（中国の銅銭が多い）が、紐

を通した網の状態出土することが多く、浪岡城では四例ほど発見されています。その中のひとつが、5971枚の数をみた事例です。

発見当初は、ヘソクリとして隠し忘れた銭をそのままにしておいたものだろうと考え、「備蓄銭」として紹介しました。ところが、全国的にもこのような発見例が多く見られ、忘却と考えるより、その埋める場所の大地神から土地を借りるための契約銭ではないかとの考えも出され、「埋納銭」として報告するようになりました。

さて、皆さんの意見はどちらでしょうか。

（元浪岡町史編集委員・工藤清泰）



内館の銭縶の出土例（5,971枚）